

4 ほてい 1 棟



指 定 町指定保護有形文化財 昭和 62 年（1987）3 月 6 日

所在地 佐川 にしまち 西町

年 代 江戸時代後期～明治初期

もとは浜口家の酒造工場の一部で「野菊」という銘柄の酒を製造していた。その後、佐川醸造より司牡丹酒造株式会社の工場に併合され、戦後から昭和 53 年（1978）頃までその一部は料亭として営業されていた。一般客用ではなく、文人墨客の集う司牡丹酒造の社交クラブのようなものであり、酒文化の発信基地的要素が強かった。平成 8 年（1996）6 月、その伝統も受け継ぎ、装いも新たに「酒ギャラリーほてい」として誕生し、現在に至っている。

なお、「ほてい」の名称は、浜口家から竹村家に養子に入った竹村仁作が西洋骨董「ほてい商会」を京都で経営していた関係で、竹村仁作は「ほていさん」と通称されており、いつの頃からかこのクラブを「ほてい」と呼称するようになり、今にその名称が残っている。

5 ふる はた かん のん どう ほん どう 1 宇 古畑観音堂（本堂）



参道と石垣

指 定	町指定保護有形文化財 平成 1 年（1989）3 月 3 日
所在地	尾川 古畑 古畑観音堂
年 代	明治時代
本 尊	しょうかんのん 聖観音

本尊は聖観音であるが、いつの頃からか牛馬の護り仏である馬頭観音として知られ、春と秋の祭礼には近郷をはじめ当時の葉山村、東津野村、大野見村、長者村方面からも多くの馬主が参拝に來たので、尾川の狭い道は人と馬とで混雑していたといわれている。

昭和 9 年（1934）に 700 年祭が執り行われ、今も「古畑の観音さま」として篤く信仰されている。700 年祭を記念した由来札によると、その昔、聖観音は長者村堂林（現越知町）に安置していたものが盗難に遭い、運び去られる途中、古畑の峠でにわかに重くなって動かなくなり、恐れをなした盗賊は、仏像をそのままにして逃げ失せたとの伝説があり、それを古畑の人が現在地に安置した。

戦国時代の領主近沢将監、その後、深尾家の時代となっても篤く崇拝され、明治 7 年（1874）に長州大工である今井浅次、宗吉らにより再建されていたが、同 18 年（1885）の嵐で境内の大イチョウが本堂に倒れ込み損壊したので、古畑と峰の信者が中心となって再建し、明治 30 年（1897）、大正 4 年（1915）の改修を経て現在に至っている。

6

もく ぞう ぼ さつ とう ぶ

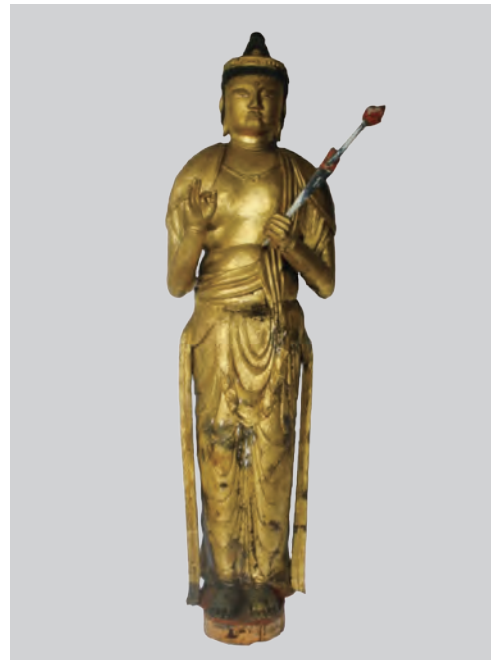
もく ぞうしやう かの りゅうぞう

木造菩薩頭部・木造聖観音立像

1 個・1 軀



木造菩薩頭部



木造聖観音立像

指 定	町指定保護有形文化財 昭和 48 年（1973）4 月 20 日
-----	----------------------------------

所在地	尾川 古畑 古畑観音堂
-----	-------------

年 代	木造菩薩頭部：室町時代 木造聖観音立像：江戸時代
-----	--------------------------

総 高	21.6センチ（木造菩薩頭部） 102.0センチ（木造聖観音立像）
-----	-----------------------------------

木造菩薩頭部

ヒノキ材、寄木造、彫眼の彩色像の頭部である。三道下で体部に挿し込んでいた頭部が残ったもので、頂一顎が 14.0 センチ、髪際一顎が 10.2 センチ、面幅が 10.0 センチ、両耳の後方で短い後頭部を欠失する。

天冠台を刻出し、毛筋を丁寧^{ふる はた}に刻み、頬の張ったまろやかな顔におだやかな面相を表し、額に木製の大きめの白毫^{てん かん だい}を嵌入し、三道を刻んで荒い内削りを施す。彩色は剥落している。

木造聖観音立像

ヒノキ材、一木造、彫眼の粉溜^{ふん だめ ぞう}像で、内削りはない。宝髻^{ほう けい}を結び、天冠台を刻出し、地髪部正面に化仏^{け ぶつ}を置き、毛筋を刻み、地髪の巻毛^{りょう じ だ}が両耳朶^{うち ぐ}にかかる。白毫相のおだやかな面相を表し、三道を刻む。天衣、条帛^{てん ね}、裳^{じょうはく}をつけ、右手をまげて前方に上げて掌を前にして第一指と第二指を捻じ、左手はまげて胸前に蓮華をとって直立する。

頭・体部を通して両手上膊部^{じょうはくぶ}も含めて二材から彫り出し、両手肘から先と垂下する天衣を短く。衣褶^{は いしゅう}がやや煩雑であるが、総じておだやかなつくりの像である。

7 ふる はた かん のん どう わに ぐち 1 口
古畑観音堂の鰐口



指 定 町指定保護有形文化財 平成 18 年（2006）2 月 10 日

所在地 尾川 古畑 古畑観音堂

年 代 室町時代

寸 法 径 21.3センチ 総厚 8.3センチ 肩厚 5.0センチ

ちゅうどうせい
鋳銅製。耳は片面交互式で、基部の幅 4.8 センチと 5.0 センチ、出 3.0 センチで、肩は接合部を頂点としてゆるやかな山形をなし、甲盛りは低い。目は上辺が付根部より斜め下に向かって下がり（出 1.0 センチ）、やや出の少ない唇（出 0.7 センチ）に連なる。口の開きは 1.3 ～ 1.4 センチである。

両面とも中央に円形素文の撞座をかまえ（径 8.5 センチ）、その外側に 2 条の圏線をめぐらし、縁との間に中区と銘帯をつくる。中区と銘帯の間は 2 条の圏線で分かち、縁にも 2 条の圏線をめぐらす。全体に光沢があり、鋳上がりはよい。

8

だいじょう いん もく ぞうじゅう に しんしょう

大乗院木造十二神将

く
12 軀

指 定	町指定保護有形文化財 昭和 48 年（1973）4 月 20 日
-----	----------------------------------

所在地	佐川 川内ヶ谷 大乗院
-----	-------------

年 代	室町時代
-----	------

像 高	49.5 ～ 54.0センチ
-----	----------------

いずれもヒノキ材、寄木造、玉眼の彩色像で、内削りを施す。各像とも頭部は面部で矧いで、体部に挿し込み、体部は前後二材矧ぎで、両肩先で両手を矧ぎ、両足は別材で彫成して挿し込み、足の裏一杯の枳（ほぞ）で岩座に挿し込む。

国指定の重要文化財、木造薬師三尊を安置する厨子の前、一段低く一列に安置されている。十二神将は十二夜叉大将、十二神明王ともいい、薬師如来の眷属である。薬師如来を敬う信者のために一切の苦難を取り除こうと働く。

12 人の将がそれぞれ武装して武器を持ち、闘う姿勢で薬師如来を護っている。
(現在は非公開)

9 もく ぞう あ み だ にょ らいりゅう ぞう 木造阿弥陀如来立像 1 軀



阿弥陀堂

指 定	町指定保護有形文化財 昭和 48 年（1973）4 月 20 日
所在地	佐川町総合文化センター（黒岩 台住 阿弥陀堂）
年 代	室町時代
像 高	83.0センチ

ヒノキ材、寄木造、玉眼の漆箔像で、内刳りを施す。肉髻を低くつくり、髪際を直線とし、螺髪は切付螺髪で、目は伏目につくり、口を開き加減に表す。顔は面長だが張りがある。衲衣を偏袒右肩につけ、右肩から右手前膊部にかけて祇支がかかり、右手をまげて前方に上げて掌を前にして第一指と第二指を捻じ、左手は垂下して軽くまげ第一指と第二指を捻じて踏割蓮華座上に立つ。

よく整った阿弥陀如来立像で、もと下方にあった台住寺の本尊であったが、台住寺の廃寺後、阿弥陀堂に移されたものである。平成 29 年（2017）6 月に佐川町総合文化センターへ移管している。

10 の ぢ そ う どう え ま 野地騒動の絵馬 1 枚



奉獻 爲西田楠吉君全癒
山瀬上下伏尾塚谷祝口二之部組合外四名
(左右縦枠に記された銘)



野地騒動記念碑

指 定	町指定保護有形文化財 昭和 48 年 (1973) 4 月 20 日
所在地	青山文庫 (斗賀野 ^{しばのぼう} 芝ノ坊 白倉神社)
年 代	明治時代
寸 法	上部屋根形 縦 79.5センチ 横 88.0センチ

明治 25 年 (1892) 2 月、大日本帝国憲法のもと第 2 回衆議院議員総選挙が行われ、その際、政府による苛烈な「選挙大干渉」が挙行された。高知県は特に激しく、斗賀野村 (現佐川町斗賀野) 野地の地で、自由党と国民党 (与党) が争い、死者の出る抗争となった。後にこれを「野地騒動」という。この抗争で、重傷を負った自由党员西田楠吉の傷が平癒したのを祝い、仲間達が解願奉納した絵馬である。

鉢巻きをしたり、鉄砲を構えたりした緊迫感のあるこの絵馬は、自由民権史上貴重な資料である。左右の縦枠に銘がある。

11 やま さき しき てん たい ぼう えんきょう
山崎式天体望遠鏡 1 台



水沢緯度観測所時代の山崎正光氏

指 定 町指定保護有形文化財 昭和 60 年（1985）4 月 10 日

所在地 佐川町総合文化センター

年 代 昭和時代

天体観測家である山崎^{まさみつ}正光が岩手県水沢緯度観測所の技官当時、「クロムメリン^{すいせい}彗星」を昭和 3 年（1928）10 月 26 日に世界で初めて発見したが、東京天文台に問い合わせの情報をハガキでしたため、3 週間後に南アフリカのホルベスに見つけられたので「ホルベス・山崎彗星」と当初はいわれたが、後にクロムメリン彗星と命名された。しかし、アメリカの太平洋天文学会は山崎正光の功績を讃え、日本人初のドノホー賞牌（メダル）を授与した。

山崎正光は昭和 34 年（1959）5 月に没したが、彗星を見つけた反射望遠鏡は自作で、自ら磨いた反射鏡（口径 20 センチ）である。この反射鏡をはじめ望遠鏡の部品が子孫の家に残されているのが発見され、没後 26 年経って「山崎式天体望遠鏡」として復元されたものである。

12 なかぐみ かのん どう わにぐち 中組観音堂の鰐口 こう 1口



中組観音堂

天正
升年十一
月陽
鑄名

指 定	町指定保護有形文化財 平成 21 年（2009）1 月 13 日
所在地	斗賀野 しばのぼう 芝ノ坊 白倉神社（中組 観音堂）
年 代	安土桃山時代 天正 20 年（1592）
寸 法	径 22.0センチ（面径 20.0センチ） 総厚 8.0センチ 肩厚 5.8センチ

ちゅうてつせい
鑄鉄製。耳は両面式で、基部の幅 5.2 センチ、出 3.2 センチで、肩は接合部を頂点として山形をなし、甲盛りは低い。目は上辺が付根部より斜め下に向かって下がり（出 1.3 センチ）、やや出の少ない唇（出 1.0 センチ）に連なる。肩に鑄バリが残り、片面は上部が残るものの面のほとんどを欠失し、残った片面の唇も一部欠失する。

面部の残った片面は中央に六葉単弁の花文を鑄出した撞座をかまえ（径 5.0 センチ）、その外側に 1 条の圏線（けんせん）をめぐらし、縁との間に中区と銘帯をつくる。中区と銘帯の間は 2 条の圏線（ようちゅうめい）で分かち、縁にも 2 条の圏線をめぐらす。銘帯に陽鑄名がある。